
戦場のヴァルキュリア ~未来へのキズナ~

名無しの7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場のヴァルキュリア～未来へのキズナ～

【NNコード】

N3292N

【作者名】

名無しさん

【あらすじ】

旋律が降り注ぐ空。見上げればモノクロの空。その空へとまた、大事なものが消えていく。何度きれいな夢を見ても、目が覚め空を見れば、映るのはすべてが消えていくモノクロの空。彷徨い続けた結果、人は何を思い、何を見つける？

プロローグ（前書き）

「んにちは、名無しさんのフです。初心者なので
完結までどうか、あたたかい田で見守つてい
ただけると幸いです。

とまあ前置きはこのぐらいで。

戦場のヴァルキュリア～未来へのキズナ～
始まりです！！

プロローグ

左右が切り立つた崖に挟まれた山道で、金属音が響いていた。飾りがなく片手で振れる両刃の剣と、濃い青色で刀身が螺旋状になっている槍が交差するたびに、周囲に金属音が鳴り響く。

剣を振っているのは二十代前半と思える黒色の髪と瞳の男性だ。男の左わき腹と右足の太ももからは血が流れている。

槍を振っているのは二十代前半と思える長い銀髪と赤い瞳の女性だ。おそらくこの女性が男にけがを負わせたのだろう。

「ハアッ！！」

「ガハッ！？」

何回か打ち合つた後に男性がよろめく。女性は男がよろめいた瞬間、右足の踏み込みと同時に槍を突き出す。

突き立てられた槍を受け切れず、男は胸の中央から血を流しながら地面を転がつていき、数回転がつてから停止する。

「ぐ・・・・・そ・・・・・」

男は自分の意識が薄れしていくを感じた。薄れしていく意識の中で男は、女性が近寄つて来るのを、気配と足音で察する。

「いいまでだな」

女性の声が耳に届くと同時に、男は光に包まれる感覚に落ちた。そして男はなくなりかけていた意識を完全に閉じた。

第一話 出会い（前書き）

投稿ですが一週間に一話のペースで、なるべく書いていきたいと思っています。

それでは・・・

第一話、出会い

始まります！

第一話 出会い

地球によく似た世界ニッヂ・ドナルダ。魔法が文化として発達している」と以外は、地球とあまり変わらない。

「こがあたりかな?」

その世界の空を飛びながら私、高町なのはは眩いた。いま私は次元震が起きた場所へと向かっている。

『マスター、生命反応を確認しました』

「わかつた。ありがとう、レイジングハート」

レイジングハートが生命反応を確認したみたい。

次元漂流者の可能性が出てきた。次元漂流者とは、世界をまたいだ迷子だと思えば簡単だと思う。

『いそいでください。反応が徐々に弱まっています!』

「えー? だつたら急がないと...」

反応が弱まっている。それはつまり、次元漂流者の人は死にかけているということだ。

私がその人を見つけたのは、その会話から数分後だった。

生命反応が確認された場所は、木が生い茂っていたので、レイジングハートに言わなければ気づけなかった。

次元漂流者的人は仰向けになつて倒れていた。服装は青を基調とした軍服と思え服。その服も胸の真ん中や、右足の太ももの辺りが赤く染まつていた。顔は黒髪の前髪で隠れている。

（なんて酷い怪我・・・）

私はそばまで近づき、両膝を地面につけてから、右手で前髪を払つた。私よりも年上だと思える男性で、その表情はすごい穏やかで・・・まるで死を望んでいるかのような表情だった。

（死にたがつているのかな？・・・「うん。例え・・・そうだったとしても、死にかけている人を助けないなんてことは・・・私にはできない！」）

「お願い、レイジングハート・・・」

『yes, my·master』

私はレイジングハートをその人の上に置いた。すると、桃色の光が、男性を包み込み始めた。

（応急手当みたいな魔法だけど・・・無いよりは・・・）

けど、傷が治るどころか予想外のことが起きた。

「ブツ、ゴフツ、ガハツ、ゴホツ」

「ええ！？」

突然男性が苦しみ出したと思つたら、血を吐き出した。あわてて魔法を解く。解くと先ほどの表情に戻つた。

(どうして・・・とにかく迎えを呼ばないと)

その後、その男性はへりへと収容され病院へと運ばれました。運送の途中に何度か魔法で治療しようとしたので、吐血すると説明して止めました。

第一話 出会い（後書き）

あ～つといい忘れた。

たまにですが、一話連続だつたりします。
こちらの気分、もしくは進みがよかつたら
一話連続でいきます。

次回予告

皿山紹介とちよつとしたハプニング
とまあこんなふうに次回予告もやれ
たらやつていいくと思います。

第一話 自己紹介とちょっとしたハプニング（前書き）

うーーん。 Bieberしたものかな？
投稿がかなり遅くなる可能性がある。

まあ・・・そのときになつたらお知らせするとして。

第一話 血口紹介とちょっとしたハプニング

始まりますー！

第一話 自己紹介とちょっとしたハプニング

第一話 自己紹介とちょっとしたハプニング
なのは v.i.e.w

男性を保護した日から三日後に、私は
男性を収容した病院に訪れていた。

「あの人・・・大丈夫かな」

『マスター・・・まだ悔やんでいられ
るんですか?』

三日たつてからきた理由は、あの事を
を悔やんでいるからだ。あの事とは、
魔法で治療しようとして、吐血したこ
とだ。何も知らないとはいえ、彼に
酷いことをしてしまった。

『ですがマスター。あの行動は間違つて
いません。ですから・・・』

(レイジングハートが何を言いたいのか
は分かる。でも・・・)

気分が沈んでいたせいか、下を向いて歩いて
いた。下を向いて歩くとどうなるか?
そう・・・何かにぶつかる。

「キヤツ！？」

「え？」

何かにぶつかった私は、しりもちをついてしまう。いたたとお尻をさすつていると、聞きなれない声が降ってきた。

「ああすまない。大丈夫か？」

「あっはい。だいじょ・・・」

上を見た私は硬直してしまった。その場に立っていたのは、あの時保護した男性だった。患者さんが着る真っ白い服を着ている。

「あ・・・」

突然のことでの思考が停止してしまった。男性は訝しげにこちらを見ている。

『マスター・・・いつまで尻もちをついているのですか？』

「え？・・・ふにゃああー？」

レイジングハートに言われてあわてて立ちあがる。あわてて立つと大抵何かにぶつかる。

「あがつー?」

「あや、ひーー?」

あわてて立ち上がったからか、男性の腹部に頭突きをしてしまった。私は頭に、男性は腹部に手を当てしばらくその場につづくまつっていた。

立ち直るのに五分くらいかけてから私は男性と共に彼の病室へと向かつた。

「あの・・・」めんなさい」

病室についてから、私は男性に謝罪する。

「いや・・・かまわないよ。反応できなかつたばかりも悪かつた」

私は起きるとことしごこまつ。ひつきり怒られたと思つていたから。

「それよつも教えてほしこ」とがある。君の名前といふ世界についてだ

え?つとまた思考が停止しきまつ。

「あの・・・びひつて?」

「どうしてつて・・・君は俺を保護したんだろう?保護してくれた人の名前を知らないのもなんか変だしな。世界については君の名前聞いた後にでも説明してもらつたりどうだ?つと医師に言われた」

そういう理由ならいつか。と思つた私は、一度ほんと咳払いしてから右手を差し出しつつ、

「私は高町なのはです」

「マサト・シ・アーヴィングだ。よろしく」

互いに握手をかわす。

なのはview end

第一話　自己紹介とちょっとしたハプニング（後書き）

次回予告

第三話　形見

わーーてわいどうなる」とやら・・・
あーっとやうだった。一時期投稿
速度が上ります。理由はあとで。
ではまた、次回をお楽しみに！！

第三話 形見（前書き）

投稿が速くなるとが遅くなるとか言つて
すみません。

後書きで詳しく説明します。

それでは・・・

第三話 形見

始まります！

第三話 形見

なのはview

この世界のことを説明する前にひとつだけ質問してみた。

「アーヴィングさんは・・・魔法って信じますか?」

私の質問にアーヴィングさんは田を細めた。なんとなく予想していたので、あまり頼着せずに話を始める。

「こま、アーヴィングさんがいる世界は、ミシートチルダとゆう世界です」

「//シテ・・・チルダ?」

「はい。この世界は魔法が文化として発達しています。そして、首都クラガナンには時空管理局とうう組織があります」

「時空管理局?」

「はい。簡単に言いますと、警察署と裁判所を一つにした組織です。私はその組織で教導官をしてこまく」

「・・・・・」

とりあえずあらかたの説明はした。私の説明を聞いたアーヴィングさんは、顎に右手の人指し指をあて、黙つてしまつた。整理しているのかな?と思つていると不意に、

「すまないが・・・ナイフを知らないか?」

「え? ナイフ・・・ですか?」

私の質問にアーヴィングさんはうなずいた。

「え・・・つと『めんなさい。たぶんですけど、管理局の方で処分したかもりません』

私が答えると、アーヴィングさんは目を大きく見開き、その後「そう、か」と呟いてからうつむいてしまつた。怪訝に思つた私は思い切つて聞いてみることにした。

「あの・・・ナイフがどうかしたんですか?」

「母の形見だ」

「かた・・・み?」

声がかすれてしまった。形見が意味するのはただ一つ。私は何も言えなくなつてしまい、うつむくことしかできなかつた。

『なーのはー』

「ふにゃああー?」

突然半透明のモニターが出現し、そこから場違いの陽気な声が聞こえてくる。

「はつはやてちやん!..」

『な~んかタイミング悪かつたみたいやな。
なんやその空氣?』

モニターに映っていたのは、私の親友であり、いま配属している部隊の隊長を務めている女性です。

『ん? もしやその人か? なのはが保護した人は』

はやてちゃんがモニターからアーヴィングさんを確認する。ちなみに、アーヴィングさんは目を大きく見開いて、突然の事に驚いている。

「え~っとそうだけど・・・どうかしたの?」

『ん~なんか。その人が持っていたものがウチ届いているんよ』

「・・・その中にナイフってある?」

『ナイフ? それらしいはあるけど、どうかしつ』

「それ持つてきて早く！！」

私が声を張り上げたこと、はやてちゃんは驚いてはいたが、持つてきてくれるらしい。

その通信から数十分後に一人の女性が病室を訪れた。

「あつフェイトちゃん！！」

「やつほ～なのは。驚いたよ。なのはがいきなり声を張り上げるから」

「こやはは、『メン』

訪れたのは金髪をツインテールにしたフェイト・テスター・ロッサ・ハラウォンちゃん。私の親友です。

「はいこれ。頼まれたナイフだよ。たぶんこれだと思つけど」

フェイトちゃんが差し出してきたのは一本のナイフ。長さは握りこぶし二つ分くらいで、直刃で飾りが無かった。

「これで合つていますか？」

私は受け取らずにアーヴィングさんに確認した。彼はうなずいて肯定を示した。私はフェイトちゃんへと視線を移してうなづく。それだけでわかつてくれた

「うー、フロイトちゃんはアーヴィングさんと近づきナイフを手渡した。

「……」

(なのは。あのナイフは何だったの?)

アーヴィングさんは受け取ったナイフを見つめている。それを見たフロイトちゃんは不思議に思ったのか小声で私に聞いてきた。

(うそ。お母さんの形見なんだって)

(かた・・・み?)

フロイトちゃんも私と同じ反応をしている。無理も無こと思つ。すると、アーヴィングさんがこちらを向き質問してきた。

「すまないが・・・君の名前は?」

私とフロイトちゃんはポカーンとしてしまつ。あれ?と考え直してみると、フロイトちゃんが自己紹介していないことに気付いた。

「フロイトちゃん・・・自己紹介した?」

「じい・・・ない」

その後、なぜだかしらないうび、「めんなさい」と連呼

し始めた。当然、アーヴィングさんは戸惑つ。それを見た私は苦笑いをしていた。

そこから血口紹介するまで数分かかったのは余談である。

なのはview end

第三話 形見（後書き）

投稿速度についてですが、

いま自分は学生で冬休みに入っています。

なので、冬休みの間は速くなるということです。

遅くなるのは・・・

来年からですのまだ先です。時がきたらお伝えします。

それでは・・・

次回予告

第四話 機動六課

お楽しみに！～！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3292z/>

戦場のヴァルキュリア ~未来へのキズナ~

2011年12月25日12時46分発行